時事新報

（昨日の續き）

養蠶論

日本の生絲は其素性に申分あけれども製方製法の精粗不精にて優劣百掴の荷物なれば絲れ精粗、光澤の諫寵百掴が百掴不同あるが如き場合もありて一々之を撿査して其精粗大小の種類を區別せざる可らざる等其取引に手數を要して大市場の商品たるに適せず甚だ以て不都合ありとは我輩の毎度痛憤して已まざる所にして其原因の我國蠶絲業の規模尚甚だ狭小にして養蠶家と製絲家と分明に其業を分たざるが故なりと斷定して可あらん我輩の毎度論ずるが如く養蠶は農の業にて農家の手と成る可きものなれども製絲の工の業に屬し製絲所の人々が其專門の技術を以て之を製せる可きまでよして農工各其業を分てよそ適當あるべけれども我國の蠶絲業は規模の狭小なるが爲にや未だ充分に此區別を立てず今日の實際より於ても製絲所の蒸汽及水車機械にて製ぜたる器械絲と稱する物は其數の割合甚だ少なく坐繰並に揚繰と稱して養蠶家の簡單なる手枠にて繰りたる物が殆んど生絲の大半を占め居れりと云ふ今分業法の便宜より申せば農家は蠶を養ひ繭を取り其繭の儘にて之を製絲家に賣り渡し製絲家は一手を以て其繭と撿別し同一の水を用ゐ同一の機械と職工とを以て一齊に之と繰り上ぐるの順序と出づると肝要なるに然るに今日我國の養蠶家は敢て繭と製絲家に賣ることを爲さず不完全なる自家の熟練を以て強て之を絲に製せんとするが如くなるとも是れは其所持の桑田甚だ少なく養蠶額も亦隨て少なき爲に繭を得るの後爭ふて之を賣ることを要せず手遊び半分に之を繰りて他日幸に生絲の好市況あるに當りて聊かなりとも其繰り手間賃を得れば農家一般の人情其時間と勞役とを計算せずまて繭の儘にて賣り捌くよりも餘程利潤なりと頑信するもの如きまて畢竟一家の養蠶額の割合に少なき爲に故ならんなれば、今ゐ及んで養蠶製絲兼業の弊を破らんとせば養蠶地方到る處に桑田を取り廣めて家々は養蠶額を今日の幾倍に增加するに若かざるなり斯くて家々は養蠶額を增加まて成繭季節毎ゑ養蠶家の室内一時ゑ高く繭山を積み上ゑ不完全なる自家の手枠おどにて綅ゝ之と繰り立つるに暇あらざることも爲れば蠶絲業上の分業も行はれて養蠶家は其生繭を製絲家に賣り製絲家は製絲の業を一手に引き受け兩樣始先て其專門の業に從事することを得るに至らん我輩ゐ未だ精密ある調査と遑なきが故に日本の養蠶家は一戸に付き平均凡そ何程位れ繭を收穫するや又伊太利其他の國々に比較まて家々平均の收穫高にんそ何程位の差違あるや今俄に之を斷言すると能はざれども或る人の說に日本と伊太利との蠶業は其規模の大小に殆んど車と袋との相違なりと云へり益ゑ伊太利の養蠶地方まて季節毎ゑ生繭を買ひ行くものは就れも車を挽き廻はるの習ありとも日本は繭商人は袋と擔ふて之を買ひ廻はるが故ならん斯かる習慣は外見を以て蠶業の規模を感測す可きに非ざれども繭商人が繭を買ひ廻ゐる所の道具より推して家々養蠶額の多少を測るも亦是れ一種れ推測法にして兩國養蠶規模の大概を知る可況なり意ふに我國の農業家は古來米作を專門とし養蠶れ如きは兒女の手遊び同樣に見做して養蠶地方の人々にても未だ其全力を傾ひけざるの氣味なきに非ず斯ゐる事の次第にて唯悠々と過ぎ去りなば我蠶絲業の發達實に思ひも寄らざるとおらんあれば富國の志あらんものは今に及んで大に之を振起するの策を講せざる可ら予而して其實施るし、唯在來の畑地稻田を變しまゆまて之を桑田に變ずるの一事あるのみ斯くて桑田を取り廣げて全國到る處桑樹影濃かあるの日に至らば家々の養蠶額は次第ゑ增ゝ養蠶製絲の業も分れて日本の生絲ゐ悉く器械製と爲り其品位も亦ます〳〵上りて生絲の海外輸出は果まて今日に幾十倍して日本養蠶の實況は以て歐米市場れ絲況を決するお至ゑん事此に至りて日本富國の策始先て立つべし是れ即ち我輩ゑ熱心して已まざる所以あり

（畢）

官報

○外務省告示第三號

今般清國廈門口ニ在ル帝國領事館ヲ廢シ帝國副領事代理ヲ派シ廈門口ヲ兼掌セシム

明治二十年五月十三日　外務大臣伯爵井上馨

○東京府令第二十四號

私立學校ニ於テハ校名ノ上ニ私立ノ二字ヲ冠スヘシ

私立學校ニ據リ門標ヲ掲クヘシ

但生徒募集ノ爲メ新聞紙等ヘ廣告ヲナスニ當リテモ校名ノ上ニハ私立ノ二字ヲ冠スヘシ

明治二十年五月十三日　東京府知事高崎五六

（以上私立何々校舍）

○軍艦竣着　天龍艦は去る八日解由拔浦去る十一日函館に投錨金剛艦は去る九日兵庫に入港せり

○神戸兵庫出入舶舶

去る四月中神戸港に於て出入せる船舶は左の如し

西洋形船出入總數五十三艘內出船二百五十九艘入船二百九十四艘內出船三百五十五艘入船二百五十四艘、內出船三百五十七艘、日本形船出入總數三百八艘內出船百五十一艘入船百五十七艘、內出船百五十七艘入船百五十八艘、入船百六十一艘、日本形船出入總數五十六艘內出船二十五艘入船三十一艘、內出船二十六艘入船三十艘、內出船二十九艘入船二十八艘、內出船二十七艘入船二十六艘、內出船二十五艘入船二十四艘、內出船二十三艘入船二十二艘、內出船二十一艘入船二十艘、內出船十九艘入船十八艘、內出船十七艘入船十六艘、內出船十五艘入船十四艘、內出船十三艘入船十二艘、內出船十一艘入船十艘、內出船九艘入船八艘、內出船七艘入船六艘、內出船五艘入船四艘、內出船三艘入船二艘、內出船一艘

○獨逸鐵坑產物輸出入高　獨逸國政府に於て刊行せし統計書に據れば千八百八十五年中の獨國鐵坑產物輸出入高は左の如し

	千八百八十五年	千八百八十六年
輸入		
鐵鑛、鐵片、鐵棒	一八九、六九三噸	一八二、一五〇噸
製鐵	四一、六九九	二七、一四五
機械及機械ノ部分	三〇、九三四	二一、一〇三
輸出	千八百八十六年	千八百八十七年
鐵鑛	一八、三一六噸	一七、七一〇噸
銑鐵	二、五〇七、五一一	一、七〇九、九二一
棒鐵	二、一九六、七五一	一、六四七、七九一
鐵軌	一、六三二、二一一	一、六四七、八一二
車輪、軸等	三五四、一七	三五五、〇四五
鐵版及鋲	四四、四二	四五〇、四六
鐵線	二、三八四、九七	一、九三〇、九三
鋼鐵	三九六、七二	三八七、七九
甲板	九二、〇四〇	七五、〇四〇
導管	八七、六九	一七、〇二
鋼鐵粗造品	一九六、六五五	二四、七三五
鐵鋼未精品	六〇〇、五四	五八八、四二
鐵精製品	八三、一一	七一、一一
汽船及移動汽機	九、五二	九、三二
其他ノ機械	七九、五二	五五、八二八
鐵橋	五五八、九五	五五六、九二
貨車（單位千馬ノ價額）	六八、六二八	一、六三八

本表に據れば獨逸國の鐵坑產物輸出高は千八百八十六年中に於て大に增加せり

○伊太利萬國鐵道會議の開設　本年の九月を期して伊國ミラン府に開設すべき萬國鐵道會議には各國も之に加入し且つ重なる鐵道より若干の委員を擧し同會議に列席せしむとふ

○歐米諸國新聞紙の數と人口とを比較　歐米諸國の多數を報道するは極て有益の事あるべし左の表は新聞紙一種に對する人口を示せるものなり

	人		人
北米合衆國	四、四七三	英吉利	四、〇九一
瑞西	五、〇七五	瑞典	五、〇二二
丁抹	六、〇二二	澳地利	二四、八三二
白耳義	六、六五九	何牙利	二四、三四二
佛蘭西	八、六四二	露西亞	一、〇九、六一一
獨逸	九、四七四	（以上本年五月十三日官報）	

雜報

○コックリ樣の解　（昨日の續き）

第三の源因はコックリ樣の說明を與ふるに最も必要ある源因にまて是れ全く心性作用より來るものあり今小生は便宜れ爲め此源因を內因と外情とに分ちて論せんと欲す內因とは人の心性自體れ性質より生ずるものを云ひ外情とは其心性作用を促せる所の種々の事情を云ふあり先づ第一に內因を述ぶれば主として不覺筋動と聯想作用とによつて生ずるなり今此二者を知らんと欲せば先づ不覺作用に付て一言せざるべからず不覺作用とは人の其心ゑ睡覺すると雖ども亦ゝ不覺作用の起る源因に六事情あり一は疲勞より生ずるなり先づ其第一れ起る所以を述ぶるに例へば我輩か時歌と作るみとを稽古するに初めに種々工風思慮して始めて成るものゐ多年此一事と以て習慣となしたるものは口と發すれば直ちに詩となり歌となるに至る是れ所謂習慣によるものあり次に第二の起る所以を述ぶるに例へば人れ眠息の間夢中にありて知らず識らず工風思慮の成るとあり是れ眠時い腦の全部第三の事情を述ぶるに人の心性は其力に大抵一定の分量ありて一方に全力を注ぐれば他方ゑ其力を欠くとあり是れ又不覺作用を生ずるの一源因なり例へば意を凝らして一心に讀書するときは更に他れ作用を覺へざるの類を云ふ次ゑ第四れ事情い腦の激動して感覺を生ぜざるとにして例へば火事のときに自ら感覺せずまて働き醉中に何をあしたるを自ら覺へざるが如し次に第五は腦の甚だ疲勞したるときは自ゑ爲す所の作用を感覺せざるとあるを云ふ次に第六は種々の思想錯雜して混同するときは又自ら爲す所ゑ覺へざるとあり以上の諸事情によりて人に不覺作用を生ずるに至るなり之れに數多の種類ありて思想作用を覺へるとあり感覺作用を覺へざるとあり例へば夢中ゑ思案工風して自ら覺へざるは其第一種に屬し火事場に自ら働きて苦痛を覺へざるは其第二種に屬し歩行まて自ら其歩行するを覺へざるい其第三種ゑ屬す而して其思想作用の筋肉の上に發現して自ら之を感覺せざるもの之を第四に不覺筋動と云ふ即ちコックリ作用の主源因あり例へば人已ゑ其心にコックリの回轉せべきを知るを以て其自ら思ふ所のものの知らず識らず手の筋肉の上に顯顯するを云ふ他語以て之を言へば人各自ゑ感覺せずして其手を以て運動を生ずる源因は眠期意向あり眠期意向とは眠先斯くあるべしと自ら期まて其一方に意を注くを言ふ是れ所謂先きの意向あるより知らず識らず手の筋肉の上に發現して其知る所の思想知らず識らず發現して筋肉れ運動と起し會ゑ其回轉の結果と見るのみあらず其回轉の結果と生ずるに至るなり例へば人の年齢とコックリに向つて問ふゑ其答あるい之を問ふ人係め其尊ぬる所の年齢を知るによる縱令明かに之れを知らざるも其大約を察知するによる蓋し不覺筋動會ゑ其明かに知るあるのものより生ずるにあらず其想像する所のものの其推察する所のものゑ生ずるあり然れども想像及び推察は往々事實に合せざることあるを以てコックリに向て過去の事跡を問ふときは適合せざるもの多しと雖ども又コックリの回轉は之と試ゑ人盡く不覺筋動を生ずると要せず其中の一人此不覺筋動によりて回轉の微力を與ふるときは他の人の力自然に之れに加はりて次第に大運動を見るに至るは必然の理あり蓋しコックリの仲間に婦人と一名加ふれば速かに回轉すべしと云ひ信仰者一人之れに加はるときは容易く回轉すべしと云ふも此理なり一昨年豆州下田港にて巡査數名相集りて之れと試むるに其回轉を見ざるに他の信仰者一名之れを加はりて試みたるに忽ち回轉の結果を現ずるに至れり其後鄕査のみにて試みたるも均ゑく回轉く